

イメージと表現方法

坂 本 信 幸

一 はじめに

〔小稿は、平成十二年十一月十一日の上代文学会秋季大会シンポジウムの報告を起したものである。本来なら論文として手を加えて投稿すべきところ、時間の都合で編集部への許しを得て、ほぼ報告のままを原稿とした。〕

今回のシンポジウムのテーマは「イメージする文学」ということですが、私はいたって想像力のない人間ですので、もう既に鈴木日出男氏たちが論じられた万葉の表現形式の問題を私なりにおさらいして、解釈に関するささやかな意見を申し述べてみたく存じます。

かつて大濱巖比古氏は「万葉集序詞私攷」(『天理大学学報』第二巻第一、二号 昭25・11)において万葉の序詞について考察を加え、

春草の繁き我が恋大き海の辺に行く波の千重に積もりぬ(10・一九二〇)という歌について、

先づ「繁き恋」と言ふのが此の歌を生み出した作者の胸中の感情であるが、其の感情把握は未だ適確な段階に至らず、従つて其の燃焼度も弱く、「春草の繁き吾が恋」と迄は言つたものの、続けて表出すべき衝迫に欠け其所で謂はば息の切れた状態で停止するのであるが、たまたま「海岸に寄せて来る波の千重に積つた様」を把える事によつて自らの表出しようとした「繁き恋」の内容の実体を把握する事が出来、俄に其の衝迫度が高まり「ああ(あのやうに)千重に積つたなあ」と言ふ発想が為されるのである。(中略)

序詞の具象性は、其の対象が現実の嘯目であること

を示してをり、其の対象から、潜在してゐた感情或いは漠として捉へやうのなかつた情緒が、俄に呼び醒され、或いは明確にされ、それが急激に作歌衝迫を形成して行く過程が、其の対象を其の俚表現せざるを得ない状態を作り出し、時に応じ場に臨んで起る衝迫のまに、予め作歌を意識しなかつたにも拘らず、自然に歌ひ出さざるを得なかつた作者の姿を髣髴せしめるのである。

と論じられました。こういった序詞についての理解は、アララギを中心とした近代短歌の実作者の立場にたつた理解で、昭和20年から30年代にかけての序詞理解としては、囁目の景物、つまり実景を序詞として叙することにおいて、作者の心情があらわれてくるというような考え方があつたかと思ひます。しかしながら、この歌においていうところの実体把握は、「千重に積もりぬ」というだけでありまして、「繁き恋」の実体を把握したというほどのことでもなく、囁目の景物に依らねば捉えようのなかつた情緒というものではないといわざるを得ません。むしろ、「波」に対して「積もる」という表現は具象性を欠き、作者のイメージによる表現と見る方が自然な感じが私にはいたします（ちなみに「積もる」の用例は他に、三九七八の「恋ひしけく」、二三〇三の「恋」の2例のみ。「積む（み）」は、六九四の「恋草」、一

七五七の「憂へ」、三二四〇の「真木」。

二 繁き恋

ここでは、すでに「繁き恋」という捉え方がなされているわけですが、恋を繁しと歌うこと自体は後掲資料Ⅰの用例を見ても分かりますように、ある面で類型的な表現といえます。

一九二〇歌は、恋繁しの表現の中の、cの「春の野の草根の繁き恋」や、dの「恋の繁けく夏草の刈り払へども生ひ及くごとし」、eの「夏野の繁かく恋ひば」また、11・二七六九の「我が背子に我が恋ふらくは夏草の刈り除くれども生ひ及くごとし」のような草の繁茂を恋繁き様に譬えるものに繋がるものであるといえますが、今の歌の場合には「春草の繁き」と単純化が図られ、「我が恋」という、自分の感情を対象化した表現に繋がっているところに特色があります。bの「世の中は恋繁し」（もつともfでは「思はねば」とされていますが）という概念化、また、gの坂上郎女の「我が片恋の繁ければかも」や、hの平群郎女の「絶えたる恋の繁きころかも」、iの大伴家持の「ここだくも繁き恋かも」（17・四〇一九）といった万葉第四期の恋を客観視した表現の生まれて来るには、資料Ⅱに見られるような「我が恋」という自己の恋情把握の蓄積があ

つたといえます。その上で、当該歌は、「我が恋」を「春草の繁き我が恋」と修飾して表現し得ているわけで、Iの「恋繁き」用例中、わずかの「春の野の草根の繁き恋」とaの「玉の緒の絶えたる恋」だけが繁き恋の具象的修飾表現であつたことから考えると、単純化の中にそれなりの到達を示したものといえます。それを恋情の甚だしさを百重千重に表現する資料IIIなどの形式の影響の下に、波を譬喩として序詞で表現したわけで、ここには、現実の囑目を必要としない表現性があるといえます。「恋繁し」と「繁し」を用言として下接させるのではなく、「繁き恋」と連体修飾となつている例が、当該歌以外はaとiだけであることも注意すべきです。

次に挙げたのは民謡に関する柳田国男の文章でして、万葉のような抒情詩とは若干異なる点があるとはいえますが、類句的表現を持つ歌の成立に対して示唆するものがあります。

……今でも全国的に有名な一つで、如何なる場合に出来たものか一寸想像のつかない歌、たとへば、

咲いた桜になぜ駒つなぐ

駒がいさめば花が散る

といふのなどは、言はゞさういふ酔中の即興作の、特殊に人の心を描へ得た実例のやうな気がする。第一

に此歌には趣意が無く、又まとまつた絵様が無い。仮に斯ういふ奇抜な空想を歌に作り得る者があつても、それを承継いで流行らせることは普通にはとても出来ない。察する所是はもと「さいた盃云々」といふ類の、さいたといふ語を初句にした出鱈目の歌が五十も八十もあつた中から、言はゞ怪我に出現した名吟であつた故に、一種神語に近い幽玄味が感じられて、終に批評を絶した古典のやうな待遇を受けて居るのであらう。

（『民謡覚書』柳田国男全集第17巻）

資料IVの「我が恋ふらく」の用例で見ると、③の「間なく時なし我が恋ふらくは」や、④、⑦、また②や⑤、⑬、⑭、⑥、⑨、⑩、⑪などの絶え間なき自己の恋の思いの表現は、柳田の挙げた民謡の「咲いた」にあたる部分であつて、その間断のなさをいうにあつて、上の句をさまざまに付けたと見ることができるところで、その上の句には囑目の景物が表現された場合もあつたでしょうが、そうでなく、それを言わんがために想像した表現も多くあつたものと考えられます。⑭の作者未詳歌は石川人足の遷任にあつて筑前国蘆城の駅で送別の宴を開いた時の歌ですが、「間もなけむ」を導く上句の「大和道の島の浦廻に寄する波」は、現前の景ではなく、人足がこれから辿るであろう途次の景物をイメージした作であることなどが参考になります。お

そらく相当たくさんにそういった歌が作られた中で、これらの歌が残されてきたものだといつて良いでしょう。Iの用例においても、恋愛という自己の恋情の表現をキーワードとして、そこに収斂する形でさまざまな表現がなされた結果これらの万葉歌が残っているわけであつて、類型的或いは固定的といつてよい心情部を持つことによつて、イメージの豊かさや表現の多様性が獲得できたものといえます（近代歌人である吉井勇が『天彦』において、「寂しければ」という句を冒頭に据えた多くの作品を形成したのは、作品の完成度とはともかく、面白い試みであつたと思います）。

秀歌として知られる坂上郎女の、

夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ（8・一五〇〇）

なども、dの「恋の繁けく夏草の刈り払へども生ひ及く」とし「やeの「夏野の繁くかく恋ひば」などの恋愛表現を背景として、「夏の野の繁みに咲く姫百合のごとき秘めた恋」は、激しく繁き恋であつたことを暗喩するもので、「夏の野の繁みに咲ける」をただ単に姫百合の咲いている囑目の景とのみ解するのは、作者の意図と離れた解といわざるを得ないでしょう。一五〇〇にはまた、一九八三などの「人言」の繁きイメージもあつて、人の噂のかしきで激しい恋の思いに耐えている苦しさが、イメージされ

ることにおいて、秀逸な作といえるのではないのでしょうか。

三 「我が恋止まめ」

ところで、IIの「我が恋」という自己の恋情把握表現の中に、傍点を付したように「止む」という語と結びついて一つの形をなした歌々があります。多くは恋の止まぬことを嘆くものでありますが、その中で、vなどのように「……こそ 我が恋止まめ」と「こそ」已然形で結ぶ構文の歌が幾つか特徴的に見られます。ところが、sの二九五八だけは、コソが用いられているものの、結びは「止まむ」と諸注釈に訓まれており、コソで終止する解釈を諸注は採っています。万葉考のみが「ツネニミエコソワゴヒ）ヤマメ」と已然形で読んでいます。これには、例えばII・二五〇一の「里遠み恋ひうらぶれぬまそ鏡床の辺去らず夢に見えこそ」などのように「見えこそ」という結びの型も考慮すべきものと考えられますが、「コソ： 我が恋止まめ」の型から考えて、「止まらず見てこそ 我が恋止まめ」とコソと呼応して已然形で結ぶ方がいいのではないのでしょうか。ちなみに、「我が恋止まむ」という表現例は、jの「いつへの方に我が恋止まむ」とpの「いかにせばかも我が恋止まむ」だけであり、両例ともその句は単独に置かれたものでなく、「いつへの方に」とか「いかにせばか

も」といった上の句を受けて続いた表現であることも考慮されて良いでしょう。「見えこそ」は当該歌を除いて全十七例ありますが、「見」だけで、ミエと訓んだのは一二一一、二八四二、二八五〇の三例のみ、他は仮名書き例一例（八〇七）、「所見」と書いた例十三例です。当該歌の前には二九五七の「床の辺さらず夢に見えこそ」と結んだ例が見え、それに引きずられて、「見えこそ」と結んだ可能性はないでしょうか。しかしながら、二九五七は「所見」とあり、当該歌の後の二九五九の「繼ぎて見えこそ」の例も「所見」とあって、当該歌だけが、「見」だけで表記されているのは、「見え」と訓むべきでない証拠であるようにも思われます。

四 「いちしろく」

夙に土橋寛氏は、『古代歌謡論』において、

万葉の歌でも集団的な宴席の場の歌は民謡と同様であるが、歌が場から独立した個人の抒情詩になると、

B（人事）は作者の心情を表現するようになり、歌の目的もBを目的とするために、A（景物）はBの表現にふさわしい一般的景物が選ばれるようになって、前後句はBを中心とする統一的な様式となる。万葉の「寄物陳思歌」「譬喩歌」「正述心緒歌」という名称は、

そのような抒情詩に於けるAとBとの関係にもとづくもので、歌の目的をBにあるとして、Bを表現する手段ないし方法として、「思い」を「物に寄せて陳べる」歌、「思い」を「譬喩的」に表現する歌、「思い」を直接的につまり「正に述べる」歌の三つをあげているわけである。（中略）

民謡においても、問答形式その他の形式に比して、寄物陳思形式（及び譬喩形式）は、もつとも抒情的な形式といえるのであって、民謡から抒情詩への発展は、主としてこの形式を通路としているように思われる。と述べておられますが、「歌の目的をBにあるとして、Bを表現する手段ないし方法として」表現を工夫する。つまり、心情叙述への景物のイメージ構築といったことが考えられるのです。

鈴木日出男氏の、「古代和歌における心物対応構造」という御論は大変有名な論文ですが、その中で次のように述べて居られます。

和歌という定型の短詩形表現にありながらも類歌性をもつことは類同的・没個性的だとは一応みとめられようが、果たして真実そうであるのか。（中略）
ある種の心情の言葉と任意の物象のそれとが対応しあう構造は、新しいイメージを豊かに構築し、詩的空間

を拡げる。(中略)したがって、心情表現部分が類歌性をもつて類同的・没個性的であるとしても、外在物象のとらえ方、対応のさせ方によって、豊富なイマジネーションを作り拡げることができた。(中略)

対応形式の表現構造は、平板になりがちな、また類同的でもある心情表現に対して、鮮明なイメージを豊かに付与する、換言すれば、一種の虚構を通して真実性を形象するということであつた。

(鈴木日出男『古代和歌史論』第4章「和歌の表現における心物対応構造」)

この論は従来類同的であることでもって没個性的であるとされてきた歌々に対して、表現における新たな意義を見いだしたものといえます。

昨今は歌の解釈も詳細になつて来ましたが、実はこういった心情叙述への景物のイメージ構築に關しての歌人たちの表現工夫については、高野正美氏「序詞の景」(『国語と国文学』昭61・11)や大浦誠士氏「万葉序歌の表現と様式」(『国語と国文学』平10・5)などに好論が見られるものの、その類同性ゆえに未だ十分積極的には考察が及ぼされていまいかと思えます。

資料Vには「いちしろし」という語をキーワードにした歌を挙げましたが、その表現は人麻呂歌集略体歌に始まり、

ほとんどが寄物陳思の歌として序詞に導かれて表現されています。そこにそれぞれの作者のイメージのありようが思われるのですが、イチシロシは、元来イチがイト・イタと同根の形状言であつて、そこに明白の意のシロシが合わさつて生まれた語であり、白い色彩と関わる語です。それ故、序に表現された景物も「露」「雪」「霧」「白波」「雲」など白の色彩を持つ景物が多いのですが、上田設夫氏(『万葉序詞の研究』)が指摘されたように、「いちしろく」を譬える序詞は花や露や雪など大部分が視覚にうったえる素材によつてゐるが、そのなかで(3)の「夜声」(注二四九七のことを指す)のみが聴覚素材であるのが異色であるといえます。『万葉集私注』には「前の作に答へたのであらうといふ説もあるが、ヒヒト(注一私注ではコマヒトと訓まな)の歌と、ハヤヒトの歌を、両方九州の氏族なるによつて並べただけと見るべきである。共に京では目新しく興味を引いて、序に用ゐられたのであらう」としています。資料VIの二四九六の「肥人の額髪結へる染木綿の染みにし心我忘れめや」同様に、奇異な習俗に対する興味から作られた作として、もともと二首一緒にされていたのであらうと考えられ、これはおそらく「いちしろく」という語がキーワードとして先にあつたというよりも、「肥人」や「隼人」といった、VIに挙げたような都以外の土地の人を素材

として歌う中から生まれた歌だと考えられ、「夜声」から「告る」への連絡もテーマに応じた内容となっているでしょう。「宇治人の諭ひの網代」や「飛驒人の真木流すといふ」「韓人の衣染むといふ」など人々に言い伝えられた、こうした歌を作る試みのあつたことが推測されます。

五 イメージの構築

イメージの構築についてさらに見てみますと、資料Ⅶの「立ちても居ても……思ふ」の表現の型では、「春柳葛城山に立つ雲」という序のイメージは、思われている妹が10・一九二四「しだり柳の縵せ我妹」に見られるような春の習俗としての縵をした若い娘子としてイメージされるものであり、「み崎廻の荒磯に寄する五百重波」の場合も、その序はただ「立ちても居ても」の「立つ」を導くだけでなく、Ⅲの波と恋情の関係からして、その序によって五百重なす思いがイメージされるべきものです。「秋されば雁飛び越ゆる竜田山」も「立ちても居ても」を導くだけでなく、1・八三「海の底沖つ白波竜田山いつか越えなむ妹があたり見む」に典型的な竜田越えでの妹との逢瀬のイメージが当時の人々には感得されていたと思われます。15・三七二二歌なども参考になるでしょう。そうしますと、「遠

つ人狛路の池に住む鳥」についても、「遠つ人」が「狛」にかかる枕詞であることは巻17・三九四七の「今朝の朝明秋風寒し遠つ人雁が来鳴かむ時近みかも」という家持の一首によって説明されているけれども、それが「遠つ人」であることについては、単に鳥の飛び立ちから「立ちても居ても」を導くだけでなく、狛路という地名と関わって、カルの音が想起され遠い人と「離る」つまり離れるという意(三三六七「目こそ離るらめ」など参照)がイメージされると考えるべきではないでしょうか。

さらに積極的にイメージを探ってみますと、Ⅳの「我が恋ふらく」の例において、①の「白砂三津の殖生」の「砂」には「愛子」がイメージされて、「三津」には「見つ」が掛けられ、旅先で見た見知らぬ娘子を「愛子」として恋うという趣が読みとれます。「白砂」の集中例は他には一〇六五歌しかなく、そういった枕詞の使用は、むしろ殖生の黄色との色彩的対比が眼目であったとしても、それだけでない意味を見るべきでしょう。④の「衣手の真若の浦の砂地」(「愛子地」)に、若く愛しい娘子が既にイメージされるのと同じであり、そういう点で、⑩の「阿胡の海の荒磯」には、長歌三二四三歌の「…吾妹子に恋ひつづ来れば 阿胡の海の荒磯の上に…」の表現と関わって、「吾子」がイメージされているといつていいでしょう。人麻呂

挽歌の、

玉津島磯の浦廻の砂(まなご) (真名子) にもほひて行かな
妹も触れけむ (9・一七九九)

の「砂」に妹を偲ぶ表現もこういったイメージが背景にあるといえます。マナゴの例としては、一三九二、一三九三、三三七二なども参考になります。

⑬の「大伴の三津の白波」にも、或いは「大伴の見つとは言はじ」(4・五六五)や「見つつ来し三津の松原波越しに見ゆ」(7・一一八五)のように「見つ」が掛けられて、「私が見たことも知らず、絶え間なく恋い慕っていることもあの人は知らないことだ」という意で嘆いたものかと思われます。

⑭の「袖乾る日なく我が恋ふらくを」では、ソデフルという音の持つイメージの広がり、

紫の名高の浦の砂地袖のみ触れて寝ずかなりなむ
(7・一三九二)

や、愛情の表現としての「袖振り」の歌などを参考にすれば、袖を振り交わすこともなく、妹の袖に触れる日もなく、涙で濡れた袖の乾く日がなく恋うる恋を想起することもできるでしょう。「乾ふる」という表記と離れば、音の享受の立場からは様々なイメージが喚起されるのです。

⑯において「我が恋」を「奥山おくやまのあしびの花の今盛りな

り」と歌った時、今日の民謡の、

二十歳過ぐれば奥山つつじ 咲いておれども人が見ん
(石川県、雑謡)

の「奥山」の持つ意味の喚起からも類推されるように、その恋は男に知られる(告げる)ことなく心の中に燃え盛る思いとしてイメージされていると思われますし、⑯では、さざれ波の中断の無さが絶える事なき恋の思いの序になっているわけですが、それが「千鳥なく佐保の川瀬のさざれ波」と歌われて、継続的に相手を求めて恋い鳴く(しば鳴く)千鳥が歌われているところに、既に一首後半のイメージが用意されているといえるでしょう。

六 形式によるイメージの固定性

以上は心情部表現が固定的であることによつて、かえつてイメージの豊かさや表現の多様性が獲得される歌々の例を見て来たわけですが、場合によつては、表現の形式から考えて、解釈にある固定性を求めなければならぬものもあります。有名な但馬皇女の次の歌、

穂積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はず時
に、但馬皇女の作らず歌一首

後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結

へ我が背(2・一一五)

は、最近までは、

あとに残つて 恋しがっているくらいなら 追いかけて行こう 道の曲がり角に 印をつけておいてくださいあなた (古典全集 昭46・1)

と口訳され、「語釈」も「標結へーシメは目印。草や木の枝を結び、あるいは杭を打ち縄を張ることもあった。ここは後を追う者が迷わないようにつけた道しるべ。」とされていたものが、最近では、

あとに残つて 恋しがっているくらいなら 追いかけて行きたい 道の曲がり角に 通せんぼの縄を張っておいてくださいあなた (新編古典全集 平6・5)

と訂され、「語釈」も「標結へーここは後から追跡する者を撃退するために杭を打ったり、縄を張ったりして塞ぎ留める装置。」と改められています。『万葉集釈注』(平7・11)でも「あとに一人残つて恋い焦がれてなんかおらずに、いつそのこと追いますがって一緒に参りましょう。道の隈の神様ごとに標を結んでお祈りをして下さい、あなた。」となつていて、かつての解釈と相違します。それには、浅見徹氏の「標結へ我が夫」という論文が影響を与えていると思われまふ。浅見氏は次のように述べて居られます。

「注釈」は家持の卷十八の歌を例証として挙げていますが、この「標」は、確かに道しるべとも共通するよう

な、標識としての性格をも含んではいるものの、しかし「標」の例としては、古語大辞典のいう「人や悪霊の侵入や侵害を防ぎ、神域であることを示す」という本来の意味を確実に有していると認むべきである。その点で、他人を導き引き込もうという道しるべとは、方向性においてむしろ逆の意味を持つていると考えなければならぬ。この但馬皇女の用例は、上代(引き続いて次の時代を考へても)「標」の解釈としては、やはりどう見ても異端である。

やはり、このシメは万葉集一般の、あるいはそれにやや先立つ原義的なシメと解すべきである。すなわち、但馬皇女は、「追い及かむ」だから追いつきやすいように道しるべを残して置いてくれと歌つたのではなく、「追い及かむ」、だから、私が追いつくのを阻止するために、あるいは「追い及く」のをあらかじめ断念するように、要所にシメを張つておいてくれ、と望んだものと解釈するべきであろう。

〔標結へ我が夫〕『松田好夫先生追悼論文集 万葉学論叢』平2・4所収)

しかしながら、この歌のように「ズハ」という語法を持つ集中の歌の型を考えた場合、ズハと呼応する表現として多くは仮想の「マシ」をとるのですが、その場合、現在の

事実^に反し、または矛盾する事態を仮に想定して、そのよ
うな事態のもとにおいて起るであろう事柄を予想してい
う、その予想される事柄は、表現者にとって望まれるべき
事柄であり、マシをとらない場合も、「酒壺になりにてし
かも」(3・三四三三)、「玉にもが」(4・七三四四)、「死にか
もしなむ」(11・二六三二六)、「浮かれか行かむ」(11・二六
四六)など、願望や意志の表現をとるのが通例だからです。
浅見氏のこの歌における「標」の理解に関わる従来^の解釈
についての疑問は、大変意義のある疑問でしたが、残念な
がらその解釈には表現の形式からして従えません。このこ
とについては、時間の関係上詳しくは触れることができま
せんので、また、別の機会に述べさせていただきます。

資料

I 「繁き恋」

神奈備の神依り板にする杉の思ひも過ぎず恋の繁きに

人麻呂歌集(9・一七七三)

a まそ鏡見しかと思ふ妹も逢はぬかも玉の緒の絶えたる恋の

繁きこのころ
古歌集(11・二二六六)

しきたへの枕ゆくくる涙にそ浮き寝をしける恋の繁きに

駿河采女(4・五〇七)

高山の菅の葉しぎ降る雪の消ぬとか言はも恋の繁けく

三國人足(8・一六五五)

b 世の中は恋繁しそやくしあらば梅の花にもならましもの

を
大伴大夫(5・八一九)

伊勢の海の海人の島津が鮑玉取りて後もか恋の繁けむ

(7・一三三二二)

木綿掛けて斎ふこの社越えぬべく思ほゆるかも恋の繁きに

(7・一三七八)

c かほ鳥の間なくしば鳴く春の野の草根の繁き恋もするかも

(10・一八九八)

d このころの恋の繁けく夏草の刈り払へども生ひ及くごとし

(10・一九八四)

e ま葛延ふ夏野の繁かく恋ひばまこと我が命常ならめやも

(10・一九八五)

夢にだになにかも見えぬ見ゆれども我かも迷ふ恋の繁きに

(11・二五九五)

まそ鏡手に取り持ちて朝な朝な見む時さへや恋の繁けむ

(11・二六三三)

里近く家や居るべきこの我が目の人目をしつづ恋の繁けく

(12・二八七六)

何時はなも恋ひずありとはあらねどもうたてこのころ恋し

繁しも
(12・二八七七)

現にか妹が来ませる夢にかも我か迷へる恋の繁きに

(12・二九一七)

f 世の中に恋繁けむと思はねば君が手本をまかぬ夜もありき

(12・二九二四)

剣大刀名の惜しけくも我はなしこのころの間の恋の繁きに

(12・二九八四)

後つひに妹は逢はむと朝露の命は生けり恋は繁けど

(12・三〇四〇)

月変へて君をば見むと思へかも日も変へずして恋の繁けむ

(12・三一一一)

ひとり寝る夜を数へむと思へども恋の繁きに心どもなし

(13・三二七五)

恋繁み慰めかねてひぐらしの鳴く鳥陰に慮りするかも

(15・三六二〇)

魂は朝夕に賜ふれど我が胸痛し恋の繁きに

狭野弟上娘子 (15・三七六七)

心ぐきものにそありける春霞たなびく時に恋の繁きは

大伴坂上郎女 (8・一四五〇)

g 旅に去にし君しも継ぎて夢に見ゆ我が片恋の繁ければかも

坂上郎女 (17・三九二九)

h 君により我が名はすでに竜田山絶えたる恋の繁きころかも

平群郎女 (17・三九三一)

i 天離る鄙とも著くここだくも繁き恋かも和ぐる日もなく

大伴家持 (17・四〇一九)

防人の堀江漕ぎ出る伊豆手舟楫取る間なく恋は繁けむ

家持 (20・四三三六)

II 「我が恋」

j 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつへの方に我が恋止まむ

神奈備の磐瀬の社の呼子鳥いたくな鳴きそ我が恋増さる

鏡王女 (8・一四一九)

k 山ぢさの白露重みうらぶれて心に深く我が恋止まむ

人麻呂歌集 (11・二四六九)

l (人麻呂歌集の傍線は、略体歌であることを示す。以下同じ。)

1 あらたまの五年経れど我が恋ふる跡なき恋の止まなくも怪し

人麻呂歌集 (11・二三八五)

m 春霞立ちにし日より今日までに我が恋止ままず本の繁けは

一に云ふ、「片思にして」

我が恋を夫は知れるを行く舟の過ぎて来べしや言も告げなむ

(10・一九九八)

明け闇の朝霧隠り鳴きて行く雁は我が恋妹に告げこそ

(10・二二二九)

n 玉だすきかけぬ時なき我が恋はしぐれし降らば濡れつつも

行かむ

o まそ鏡直にし妹を相見ずは我が恋止まじ年は経ぬとも

(11・二六三二)

p 大船のたゆたふ海にいかり下ろしいかにせばかも我が恋止まむ

(11・二七三八)

q 外目にも君が姿を見てばこそ吾恋山目命死なずは 一に云ふ、「命に向かふ吾恋止目」

(12・二八八三)

我が恋は慰めかねつま日長く夢に見えずて年の経ぬれば

(11・二八一四)

r まそ鏡直目に君を見てばこそ命に向かふ吾恋止目あがこらやまめ

(12・二九七)

我が恋は夜昼別かず百重なす心し思へばいたもすべなし

(12・二九〇二)

s 人の見て言咎めせぬ夢にだに止まず見えこそ我が恋止まむ
(我恋將止) 或本の歌の頭に云はく、「人目多み直には逢はず」

(12・二九五八)

t ひさかたの天つみ空に照る月の失せなむ日こそ吾恋止目あがこらやまめ

(12・三〇〇四)

u ……我が命の生けらむ極み 恋ひつつも我は渡らむ まそ
鏡正目に君を 相見てばこそ 吾恋八鬼目あがこらやまめ

(13・三二五〇)

……天地に言を満てて 恋ふれかも胸の病みたる 思へかも心の痛き 我が恋ぞ日に異に増さる 何時はしも恋ひぬ
時とは あらねどもこの長月を……

(13・三三二九)

我が恋はまさかまかなし草枕多胡の入野の奥もかなしも

(14・三四〇三)

伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど我が恋のみし時なかりけり

(14・三四二二)

あかねさす日並べなくに我が恋は吉野の川の霧に立ちつつ

車持千年(6・九一六)

大汝少彦名の 神こそば名付けそめけめ 名のみを名児山と負ひて 我が恋の千重の一重も 慰めなくに

坂上郎女(6・九六三)

八百日行く浜の沙も我が恋にあにまさらじか沖つ島守

笠女郎(4・五九六)

v 直に逢ひて見てばのみこそたまきはる命に向かふ吾恋止眼あがこらやまめ

中臣女郎(4・六七八)

w わたつみの海に出でたる飾磨川絶えむ日にこそ安我故非夜あがこらやまめ

麻米(15・三六〇五)

旅にして物思ふ時にほととぎすもとな鳴きそ我が恋増さる

中臣宅守(15・三七八一)

常陸さし行かむ雁もが我が恋を記して付けて妹に知らせむ

防人歌(20・四三六六)

III 「百重・千重」

沖つ藻を隠さふ波の五百重波千重にしくしくに恋ひ渡るかも

人麻呂歌集(11・二四三七)

心には千重に思へど人に言はぬ我が恋妻を見むよしもがも

人麻呂歌集(11・二三七一)

名ぐはしき印南の海の沖つ波千重に隠りぬ大和島根は

柿本人麻呂(3・三〇三)

名草山言にしありけり我が恋ふる千重の一重も慰めなくに

(7・一一二一三)

一日にも千重にしくしく我が恋ふる妹があたりにしぐれ降る見ゆ

(10・二二三四)

心には千重にしくしくに思へども使ひを遣らむすべの知らなく

(11・二五五二)

我が恋は夜昼別かず百重なす心し思へばいたもすべなし

(12・二九〇二)

心には千重に百重に思へれど人目を多み妹に逢はぬかも

(12・二九一〇)

……天雲のゆくらくらゆくらくらに 葦垣の思ひ乱れて 乱れ麻の
司をなみと 我が恋ふる千重の一重も 人知れずもとなや
恋ひむ 息の緒にして

(13・三二七二)

一日には千重波敷きに思へどもなぞその玉の手に巻き難き

大伴駿河麻呂(3・四〇九)

庭に降る雪は千重敷く然のみに思ひて君を我が待たなくに

家持(17・三九六〇)

……春花のうつろふまでに 相見ねばいたもすべなみ し
きたへの袖返しつつ 寝る夜落ちず夢には見れど 現にし
直にあらねば 恋しけく千重に積もりぬ……

家持(17・三九七八)

あゆを疾み奈呉の浦廻に寄する波いや千重しきに恋ひ渡る
かも

家持(19・四二二三)

IV 「我が恋ふらく」

隠りどの沢泉なる岩根をも通してそ思ふ我が恋ふらくは

人麻呂歌集(11・二四四三)

大野らにたどきも知らず標結ひてありかつまじじ我が恋ふ
らくは

人麻呂歌集(11・二四八一)

①白砂三津の植生の色に出でて言はなくのみそ我が恋ふらく

(11・二七二五)

みさゝ居る沖つ荒磯に寄する波行くへも知らず我が恋ふら
くは

(11・二七三九)

②ま菅よし宗我の川原に鳴く千鳥間なし我が背子我が恋ふら
くは

(12・三〇八七)

③恋衣着奈良の山に鳴く鳥の間なく時なし我が恋ふらくは

(12・三〇八八)

④衣手の真若の浦の砂地間なく時なし我が恋ふらくは

(12・三一六八)

⑤春日野の浅茅が原に後れ居て時そともなし我が恋ふらくは

(12・三一九六)

真金吹く丹生のま朱の色に出て言はなくのみそ我が恋ふら
くは

(14・三五六〇)

あらし田の鹿猪田の稻を倉に上げてあなひぬひぬし我が恋
ふらくは

(16・三八四八)

⑥千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波止む時もなし我が恋ふらく

坂上郎女(4・五二六)

⑦うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間なく時なし我が恋ふらくは

坂上郎女(4・七六〇)

茅花抜く浅茅が原のつほすみれ今盛りなり我が恋ふらくは

大伴田村大嬢(8・一四四九)

⑧我が背子に我が恋ふらくは奥山のあしびの花の今盛りなり

(10・一九〇三)

⑨白たへの袖に触れてよ我が背子に我が恋ふらくは止む時も
なし

(11・二六一二)

我妹子に我が恋ふらくは水ならばしがらみ越して行くべく
所思ほゆ 或本の歌の発句に云はく、「相思はぬ人を思は
く」

(11・二七〇九)

我が背子に我が恋ふらくは夏草の刈り除くれども生ひ及く
ごとし (11・二七六九)

⑩阿胡の海の荒磯の上のさざれ波我が恋ふらくは止む時もな
し (13・三二四四)

⑪小壅田の年魚道の水を 間なくそ人は汲むといふ 時じく
そ人は飲むといふ 汲む人の間なきがごとく 飲む人の時
じきがごとく 我妹子に我が恋ふらくは 止む時もなし
(13・三二六〇)

⑫ぬばたまのその夢にしも見継げりや袖乾る日なく我が恋ふ
らくを 人麻呂歌集 (12・二八四九)

現には直にも逢はず夢にだに逢ふと見えこそ我が恋ふらく
に 人麻呂歌集 (12・二八五〇)

⑬大伴の三津の白波間なく我が恋ふらくを人の知らなく
(11・二七三七)

⑭大和道の島の浦廻に寄する波間もなけむ我が恋ひまは
天平五年・作者未詳 (4・五五一)

むら肝の心碎けてかくばかり我が恋ふらくを知らずかある
らむ 大伴家持 (4・七二〇)

V 「いちしろく」

道の辺のいちしの花のいちしろく人皆知りぬ我が恋妻は

人麻呂歌集 (11・二四八〇)

道の辺のいちしの花のいちしろく人知りにけり継ぎてし思
へば (11・二四八〇、或本)

隼人の名に負ふ夜声いちしろく我が名は告りつ妻と頼ませ

人麻呂歌集 (11・二四九七)

我がやどの秋秋の上に置く露のいちしろくしも我恋ひめや
も (10・二二五五)

さ雄鹿の小野の草伏しいちしろく我が問はなくに人の知れ
らく (10・二二六八)

梅の花それとも見えず降る雪のいちしろくけむな問使ひ遣ら
ば (10・二三三四)

うかねらふ跡見山雪のいちしろく恋ひば妹が名人知らむか
も (10・二三四六)

川千鳥住む沢の上に立つ霧のいちしろくけむな相言ひそめて
ば (11・二六八〇)

隠り沼の下ゆ恋ひ余り白波のいちしろく出でぬ人の知るべ
く (12・三〇二三)

青山を横ぎる雲のいちしろく我と笑まして人に知らぬな
隠り沼の下ゆ恋ひ余り白波のいちしろく出でぬ人の知るべ
く 坂上郎女 (4・六八八)

杉の野にさ躍る雉いちしろく音にしも泣かむ隠り妻かも
平群女郎 (17・三九三五)

臥いまろび恋ひは死ぬともいちしろく色には出で今朝顔が
花 家持 (19・四一四八)

思ひ出でて音には泣くともいちしろく人の知るべく嘆かす
なゆめ (11・二六〇四)

隠り沼の下ゆは恋ひむいちしろく人の知るべく嘆きせめや
も (12・三〇二一)

旅にして妹を思ひ出でいちしろく人の知るべく嘆きせむかも
(12・三一三三)

平群女郎(17・三九三二)

VI

東人の荷前の箱の荷の緒にも妹は心に乘りにけるかも

久米禪師(2・一〇〇)

あさもよし紀人ともしも真土山行き米と見らむ紀人ともしも
調淡海(1・五五)

肥人の額髪結へる染木綿の染みにし心我忘れめや 一に云ふ、「忘らえめやも」
人麻呂歌集(11・二四九六)

宇治人の喩ひの網代我ならば今は王良ましこつみ来ずとも

(7・一一三七)

飛驒人の真木流すといふ丹生の川言は通へど舟を通はぬ

(7・一一七三)

かにかくに物は思はじ飛驒人の打つ墨繩のただ一道に

(11・二六四八)

難波人葦火焚く屋のすしてあれど己が妻こそ常めづらしき

(11・二六五一)

阿太人の梁打ち渡す瀬を速み心は思へど直に逢はぬかも

(11・二六九九)

寸戸人の斑衾に綿さはだ入りなましもの妹が小床に

(14・三三五四)

韓人の衣染むとふ紫の心に染みて思ほゆるかも

門部石足(4・五六九)

須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも我はするかも

VII

春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしそ思ふ

人麻呂歌集(11・二四五三)

秋されば雁飛び越ゆる竜田山立ちても居ても君をしそ思ふ

(10・二二九四)

遠つ人獐路の池に住む鳥の立ちても居ても君をしそ思ふ

(12・三〇八九)

み崎廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居ても我が思へる

門部石足(4・五六八)

君